

会津の民俗と地域性

——会津若松周辺の市神祭りを中心に——

佐々木 長 生

はじめに

一 「小盆地宇宙」会津

二 会津の市にみる地域性

結びにかえて

論文要旨

会津地方には、各地で見ることができなくなった民俗や民具が、近年まで継承されてきた。猪苗代湖周辺の湿地で代踏み用いられたナンバとよぶ田下駄や、奥会津の只見川流域でアワやキビなどの雑穀の穂摘みに用いられたコウガイ、磐梯山麓の八葉寺に奉納された死者の霊をまつる小型木製五輪塔などは、その一例である。また、貞享元年（一六八四）の『会津農書』には、「拍子田」（田遊び系の田楽）のようにこの時代まで会津地方に存在していたことなど、古い民俗の伝承を見ることができるところに、会津地方の地域性があることを筆者は考える。

本稿では、会津地方の地域性の把握の方法として、米山俊直氏が提唱する「小盆地宇宙」論に依拠しながら、会津の民俗と地域性の関連をみようとするものである。会津地方は、四囲山に囲まれた盆地で、その中心には会津藩二十三万石の城下町若松がある。米山氏の「小盆地宇宙」の基本モデルにふさわしい

地形をもつ地域である。本稿は、若松城下において初市におこなわれてきた市神祭り「十日市」と、夏の祭礼「お日市」を通してマチカタ（町方）とムラカタ（村方）との贈答行為や祭礼形態にみる若松周辺の地域性の把握を試みた。

その結果、若松周辺のマチカタにも「米引き」の行事にみるような古式を残した市神祭りの継承や、修験が関与した市立での習俗の存在（巻物）、祭礼市のなごりとみられる「お日市」など、今日まで継承されてきている民俗がある。

これらも会津の自然・歴史などの環境が育んできたものであろう。このように会津には、各地から峠を越えて新しい文化が移入しても、古い文化が消滅するのではなく、古い文化を温存しながら、新旧の文化が共存してきたという特色をみることができるところに、会津の民俗からみた地域性といえるのではなからうか。それを生みだしている背景が、会津という盆地であると、筆者は考えてみたい。